

小森貴先生のプロフェッショナリズム

インタビュー：小森貴先生(小森耳鼻咽喉科医院)

1班 赤井颯・大下玲子・木島龍輝・坂田千紘・田中智大・西田英恵・牧野健・森下勇志



目的

日本医師会常任理事の先生にインタビューさせて頂くことで、地域医療だけではなく、医療制度や社会全体に関わる医師像を知ることができ、自分の将来やこれから大学の学びを考えるきっかけになり、医師という職業の幅広さや責任の重さを知る。

キャリア

昭和54年	金沢大学医学部医学科卒業
	金沢大学附属病院耳鼻咽喉科勤務
昭和60年	県立中央病院耳鼻咽喉科医長
平成元年	小森耳鼻咽喉科医院開設・院長
平成18~24年	石川県医師会会長
平成22~24年	日本医師会理事
平成24~28年	日本医師会常任理事
~令和5年	小森耳鼻咽喉科医院院長
令和5年~現在	小森耳鼻咽喉科医院名誉院長

医師会の役割

石川県医師会会長、日本医師会常任理事等を歴任

- ①医師会では医師個人ではできないことが医師会ではできる
 - ②患者と一体となって誰もが医療を受けれることを目指して戦う
 - ③医師会では自分にも他人にも厳しくする
- ↑専門性が高いからこそ医師が自らを律する必要

実際の質問

Q. 医師を志した理由

A. 1日1回いいことができ、喜んでもらえるから

医師は病気を取りきれなくとも患者を笑顔にできる仕事、「生まれてきてよかったな」と思って亡くなれる手助けができる素晴らしい仕事。それをするためにも病を治そうとして「これ以上良くなりません」と言うことは絶対にない。必ず人を診るということを大切にしている。

Q. 考え方の変化

A. ない。

医学生や若手の時と変わらず、強い正義感を持ち続けている

昔は高額な透析の治療をするために娘を売るような時代だった。そんな貧富の差で受けられる医療が異なる世界にしてはいけないという信念を今も持ち続けている。

まとめ(医学生として)



医学的知識や権限を持つ立場になるほど、周囲から反対意見が出にくくなり、自分の判断が当然だと思い込んでしまう危険がある。患者の声を聞くことや、多職種と対等に話し合うことは、単にコミュニケーション能力を高めるだけではなく、医師の立場の強さを自覚することにもつながる。

また、災害時に専門を問わず現場に立つ姿勢には、重大な決定ができる医師だからこそ責任感が感じられる。医学生の段階から、知識が不十分だからと社会的責任まで先送りにせず、自分が将来医師になったときに背負う責任の重さや立ち振る舞いを学ぶため、積極的にボランティアなどに足を運ぶべきである。

医学生である私たちは、早く一人前の医師になることだけを目標にするのではなく、権限を持った後にどう振る舞うかまで含めて学ぶ姿勢を持つことが大切であると考えた。

現在の仕事内容

- ・開業をしている(現在手術は行っていない)
- ・夜だけで年間300人の患者を診ている
- ・妻にも患者の料理を作ってもらうなど家族で協力して患者に尽くしている
→ここまで努力しているから他の医師や同業者には厳しく接するようにしている



災害医療について



《主な内容》

- ・避難所への巡回診療
- ・オンライン再診システム
- ・行政・保健機能
- ・高齢者と小学生への医療支援
- ・バランスのとれた食事
- ・その他医療やチームの指示



《先生が伝えたかったこと》

何も知らない一回目が怖いかもしれない。
でもとにかく行ってみる! 役に立たない訳がない。
医師会会長の自分が行けば他の人たちもついてくる。
迅速な行動に移せたのも医師会会長の腕の見せ所。
自分の築いた地位を利用し、人のために役に立てるように!

まとめ(プロフェッショナリズム)

日本では未承認薬を自由に使えるようにすべきだという意見もあるが、小森先生は、すべての人が平等に医療を受けられる社会を守るために、薬は日本で厳格な審査を受け、保険適用されたうえで使われるべきだと考えていた。高価な薬を使える人だけが助かる社会にしてはならず、医療を利益基準で捉えてはならないという信念のもと、誰もが最高の医療を受けられる世界を目指していた。その姿勢には、差別なく医療を届けようとする社会的公正のプロフェッショナリズムが表れている。

53歳という若さで石川県医師会の会長に就任後も、患者の声を重視し、医療への不満を集め取り組みや、患者と直接語り合うシンポジウムなど患者と医師の認識の差を埋める活動を行った。こうした取り組みから、患者と良好な関係を築くプロフェッショナリズムが実践されていたことがわかる。

また小森先生は、会長職を6年で退いた。その理由は、責任ある立場は若い世代に譲るべきであり、反対意見が出なくなる環境に慣れてしまうことを危惧したからである。驕らず後輩を育て続けたいという思いからの決断であり、仲間や後輩を育てるプロフェッショナリズムの表れである。

さらに震災時には、専門に医療として被災地に赴き、医療活動を行っていた。医師にしかできない判断や責任があるという考え方のもと、職種を超えて協力できる体制を築いていた。その姿勢には、人間性とコミュニケーションに基づくプロフェッショナリズムが感じられる。